

後のとしおひいで、侍けるを見て、

粟田右大臣道原

玄のべとやあやめも玄らぬ心にもながからぬ世のうきにうへけん

〔枕草子三〕草は さうぶ

〔枕草子六〕卯月の晦日には、せ寺にまうづとて、淀のわたりといふものをせしかば、舟に車をかきすへてゆくに、玄やうぶこもなどの末みじかく見えしを、とらせたれば、いとながりける、こもつみたるふねのありきしこそ、いみじうおかしかりしか、たかせのよどには、これをよみけるなめりと見えし、三日といふに歸るに、雨のいみじう降しかば、さうぶかるとて、笠のいとちいさきをきて、はぎいと高きおのこわらはなどのあるも、屏風のゑにいとよくにたり。

〔東海一漚集古詩〕求菖蒲并序

行庭忽見盆菖蒲、不知其厝之者爲誰也。詩以干之、欲永屬吾也。

我自筑紫歸、空庭日日遊、空庭有何物、雪消蘭芽抽、菖蒲不知主、瓷甌橫蟠纒、鬼神非吾畏、坡仙語可羞、正是尠薄者、欲之未敢偷、願言情人意、惠斯青髮壽。

〔鷲峯文集九〕石菖盆記

有人寄石菖蒲一束、其葉之長或可二尺、或尺餘、其短也、或七八寸、或五六寸、參差秀出、尖尖獵獵、所謂水劍草是也、屈曲其根、疊結葉中、提之不亂、動之不分、貯水於盆、以涵其根、置之座右、以爲文房之一具、其色之青、可以益老眼之明、其精之感、可以收燈油之煙、則於讀書得其便、不亦悅乎、嘗聞蘇玉堂有言、石菖蒲濯去泥土、漬以清水、置盆中、數十年不枯、果然否、嗚呼我老矣、數十年之久、非所期也、唯就今日論之、時是陰氣之極、木葉悉脫、唯此一物、渾青自若、謂之歲寒草、可與松栢並稱也、且席上之觀、暗合玉堂之言、不亦奇乎、對此欲說神仙服餌之事、則醫藥非我所知也、爲之欲詠吟、則壘山歌備矣、其歌尾曰、人間千花萬草儘榮艷、未必敢與此草爭高名、可謂說得好、然豈徒草而已哉、言之長也、我唯取添銀海